

ラジオ放送  
＜令和6年10月～12月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.449



## もくじ ~ contents

### <小川洋子の「私のひきだし」4>

☞ 作家・小川洋子さんによる心温まるエッセイ

- 老いるということ *page 1*
- か弱い者ほど深く感じ取れる *page 5*
- 切り捨てない *page 9*
- たった一人の誰かのために *page 13*

### <先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 選んでくれたネクタイ (特選アーカイブス) *page 17*  
岡山県・与井教会 善積晃

### <こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちょっといい話

- ジタバタするなよ *page 21*

### <先生のおはなし>

- だれのもんな (私の本棚から) *page 25*
- みんなで見よう『安心メモ』 (信心ライブ) *page 29*
- 人を祈れる私に (特選アーカイブス) *page 33*  
京都府・田中教会 谷上正三

### <こころの散歩道>

- あなたを信頼しています *page 38*

### <先生のおはなし>

- 愛はふたたび (私の本棚から) *page 42*
- イライラ母さんからの手紙 (特選アーカイブス) *page 47*  
宮崎県・西郷教会 塚本ひろ志
- お空気様 (特選アーカイブス) *page 52*  
佐賀県・浜崎教会 寺井祥二

《小川洋子の「私のひきだし」》

「老いるということ」

皆様、おはようございます。作家の小川<sup>おがわ</sup>洋子<sup>ようこ</sup>です。今年もまた、『私のひきだし その4』と題して、お話しさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

聴いてくださるのが初めての方もおられると思いますので、少し自己紹介をさせていただきます。私は両親、祖父母、皆が金光教の信者という家庭で育ちました。子どもの頃は、父方の祖父母が教師をしておりました、岡山市の岡東<sup>こうとう</sup>教会の敷地にある離れに住み、日常生活の中で、自然に金光教の空気を感じながら大きくなりました。26歳でデビューして以来、35年、ずっと

小説を書いています。小説を書く、というゴールのない仕事を続けてゆく中、金光教の教えがいかに私を支えてくれているか、お話しできればと思っています。

さて、先日、作家でお医者さんでもある久坂<sup>くさか</sup>部羊<sup>べう</sup>さんと雑談をしている時、老いの話になりました。

「人間が歳を取って老いるのは、自然の現象でしょう。昔は、耄碌<sup>もうろく</sup>する、と言ったんです。ところが今は、認知症という病名をつけたために、老いが病気になってしまいました」  
と、久坂部さんがおっしゃったのです。

その時、耄碌する、という言葉が耳に残りました。久しぶりに聞いた気がして、何となく懐かしい気分になりました。確かに、私が子ども

の頃は、歳を取っていろいろと不都合が生じてくると、「あの人も耄碌したなあ」と言ったものです。そこには、まあ仕方がない、それが自然の成り行きだ、という一種あきらめの意味合いが込められていたように思います。あきらめる、と言っても切り捨てるわけではありません。

人間が逆らえない自然の流れを受け入れる、そんな感じでしょうか。

しかし現代では、寿命が伸び、認知症は大きな問題になっています。一家庭の中だけではなく、社会全体として高齢者をどうケアしてゆくかは、重要な課題です。それは十分理解した上で、一個人として老いとの向き合い方を考えた時、教祖金光大神様こんこうだいじんのこんなお言葉が思い出されます。

「元氣を出して信心せよ。年をとったのを苦に病むことはない。年をとつても一人前にできるのは信心だけである。信心していると、年を重ねるほど身に徳がついて、神がかわいがつてくださり、若い者が大事にしてくれるようになる」

私の父は晩年認知症が進み、施設にお世話になりました。ある日、新しく出たばかりの私の小説を持って会いに行ったのですが、もはや、私が娘だとは分からなくなっていました。父は、介護士さんに、「こちらは誰ですか？」と聞かれ、「妹です」と答えました。しかし、私はさほどショックは受けませんでした。父にはたくさんきょうだいがいましたが、妹だけはいなかったのです。だからきつと、妹が欲しかったの

でしょう。そう思うと、人生の最後に、念願の妹を持つことができて良かったじゃないか、しかも、私とその役目を果たせるのだからありがたいことだ、と思えたのです。

私は新しい本を父に見せました。

「これ、私が書いたのよ」

そう言うと、父は心底びっくりしたような表情を浮かべました。自分の妹が（本当は娘ですが）、本を書くなんて、とても信じられない、とでも言いたげでした。そうして、表紙のタイトルを読み上げ始めました。

「……を……いて……と……ぐ」

漢字は読めなくなっていたので、平仮名だけを指でなぞっていました。

その時、一瞬、たまらない気持ちになりました

た。衰えた記憶は、二度と戻ってこないことを見せつけられたようでした。しかし父は、ペー지를ばらばらとめくり、こう言ったのです。

「こんなに書いたら死んでしまう」

その口調には、心配でたまらない気持ちが溢れていました。ああ、父は娘も漢字も忘れたけれど、愛する者を心配する心だけは失っていない。老いて、あらゆるものを失うばかりの時間の中で、自分より大事な誰かのことを思う気持ちは、むしろ高まっている。これは神様が、かわいがってくださいっている証拠だ。

老いのおかげで、父がたどり着いたのは、心があってこそその境地でした。余計なものがそぎ落とされ、最後に一番大事なものを神様が残してくださいました。それが、私を心配する心だっ

たのです。

老いは失うことを意味しない。神様からの愛をより多く受け取って、信心を深めることができる。そう、父は教えてくれました。

今でも新しい本が完成するたび、父の言葉を思い出します。「大丈夫、死んでないよ」と報告します。

今日はここまでです。それでは次回、またお耳にかかりましょう。



《小川洋子の「私のひきだし」》

「か弱い者ほど深く感じ取れる」

皆様おはようございます。作家の小川洋子です、『私のひきだし』の4。今日は第2回をお届けします。

先日、結核に侵され、寝たきりになった正岡子規が、死の直前まで、新聞に連載していた随筆集『病牀六尺』を読む機会がありました。改めて説明するまでもありませんが、正岡子規は日本文学を代表する俳人、歌人で、夏目漱石の親友としても有名ですが、結核のため、34歳の若さで亡くなっています。『病牀六尺』には、不治の病に倒れながらも、文学や絵画や社会批判など、多方面への好奇心を失わず、生きるこ

とに情熱を注いだ姿が描かれています。

しかし、そんな日々の中でも、身体の苦痛に絶望し、弱気を見せることもあります。例えば、こんな一行があります。

「誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか、誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか」

同じ文章を二度繰り返し、その上、全ての文字に傍点が打たれ、強調されています。さらにその翌日、宗教を信じない自分には、神や仏の救いは届かない、と記しています。

ここを読んだ時、私は、特定の宗教を信じているかどうかは関係ない。「助けてくれるものは確かにある、と子規に向かって言いたい気持ちになりました。『金光教教典』には次のよ

うな言葉があります。

「神へは何でも願え。神は頼まれるのが役である」

弱く、苦しんでいる者ほど、深く願うことができません。願えば願うほど、神様の働きをありありと感じ取ることができのです。

結局、子規は、狭い寢床の中から、芸術家として、さらには死を意識した者としての透徹な目で世界を見通し、人間の真理に触れようとしてます。苦痛の中で生かされている理由を探ろうとすること自体が、彼の人生の意味となっけてゆきます。

か弱い者ほど深く感じ取れる。この言葉からもう一冊、ノンフィクション作家の柳田邦男さんが、自死された息子さんについて書かれた

本、『犠牲サクリファイズ わが息子・脳死の11日』を思い出します。神経症を患い、精神科の治療を受けつつ、通信制の大学に通っていた柳田さんの次男、洋二郎さんは、25歳の時、自殺を図り、脳死状態に陥ります。病院のベッド脇で、息子が書いた日記を広げた柳田さんは、そこにこんな文章を見つけます。キリスト教の教会へ通う電車の中で、窓の向こうの風景を見ている描写です。

「：ぼくは行きの電車で、孤独な自分を励ますかのように、『樹木』が人為的な創造物の間から、『まだいるからね』と声を発するかのよう、その緑の光を世界に向け発しているのを感じた」

社会に上手く溶け込めず、孤立している自分

を、しかし樹木だけは見捨てていない。緑の光を自分に向けてくれている。息子が、そんなふうに懸命に自分を励ましていたのかと知って、柳田さんは、涙が止まらなくなります。

「まだいるからね」

これは、洋二郎さんの心の中に届いた、神様の声だったのではないかと私には思われます。真まことにその声が必要としている人だけが聴くことのできる、声です。

何と優しい響きを持った言葉でしょうか。「まだ」の一言からは、決して見捨てはしないという力強さが伝わってきます。「いるからね」の一言には、ただ自分のそばに何ものかがいてくれる、ということの安心、温かさが溢れています。この言葉を聴きとった洋二郎さんが、どれ

ほど豊かな心の持ち主であったか、おのずと伝わってくるようです。

日記を読み、息子の心の内に触れた柳田さんは、洋二郎さんの腎臓を、移植を待つ患者さんに提供する決意をします。洋二郎さんの2つの腎臓は、1つは車で近郊の病院へ、1つは航空自衛隊のジェット輸送機で、九州へと運ばれました。洋二郎さんの死が、2人の命につながったのです。

神様がなさることは、人間の知恵などとても及びません。病に苦しみ抜いた若者が、他者の命を救う。こんな奇跡のような出来事が、人間の頭で考えた理屈によってなされるわけがありません。やはりそこには、人間の力を超えた何か、の働きがあるのです。

「天に任せよ、地にすがれよ」

金光様はこうおっしゃっています。任せきる、すがりきれぬものを持つている人は幸いです。

神様の声を心で受け止めた洋二郎さんの魂は、天地の懐に抱き留められていることでしょう。

それでは、今日はこのあたりで失礼いたします。また来週、よろしくお願いたします。



《小川洋子の「私のひきだし」》

「切り捨てない」

皆様おはようございます。作家の小川<sup>おがわ</sup>洋子<sup>ようこ</sup>です。『私のひきだし その4』。本日は第3回をお送りします。

私は生まれてから小学校5年生まで、岡山市にあります、金光教岡東<sup>こうとう</sup>教会の離れに住んでいました。つまり、父の実家の同じ敷地にある小さな家を借りていた、というわけです。

ですから周囲には常に、両親だけでなく、祖父母や、伯父伯母、従兄弟、そして信者さんたちの存在がありました。大勢の人々に囲まれ、にぎやかな毎日を送っていたのです。

当時は、それが当たり前だと思っていました。

しかし、今から振り返ってみれば、何と恵まれた環境であったかと、ありがたい気持ちで一杯になります。特に大事なのは、信者さんたちとの関係です。

金光教の教会とはどういう場所なのか、もしかすると縁のない方々には、想像がつかないかもしれません。おそらく、信者さん一人ひとりにとって、教会の持つ意味は違っているでしょう。ただ一つ、はっきり言えるのは、教会にはどんな人でもお参りできる、ということではないでしょうか。教会の中では皆が平等です。それは子どももの私にも、はっきり分かりました。

岡東教会は場所柄、お米屋さん、魚屋さん、日本茶屋さんなど、ご商売をされている信者さんが大勢いらっしやいました。そのほか、大学

の先生、税理士、建築士、公務員、会社員、主婦、隠居のご老人…などなど、挙げていけばきりがありません。老若男女、とにかくあらゆる人々が、教会の中では、『信者』、という言葉のもと、同じ立場を共有しています。外の世界の社会的な肩書などに、左右されることはありません。

皆さん、教会で私を見かけると、「洋子ちゃん、洋子ちゃん」と優しく声を掛けてくれます。身内でもない、言ってみれば他人の関係ではないにも関わらず、私は信者さん達との間に、特別な親愛の情を感じていました。

一人、忘れられない信者さんがいます。年はいくつくらいだったのでしょうか。子どもは大人の年齢など気にしないものです。とにかく若い

男性でした。平日の昼間でも、よくお参りに来ていました。今から思えば、どこにも居場所のない人だったのかもしれない。お広前で他の信者さんと顔を合わせるのもつらかったのか、教会の一番奥にある和室に一人、何をすることもなくポツンと座っていました。

私が顔を出すと、それまで寂しそうにしていたのが嘘のような明るい笑顔を見せ、歌をうたってくれるのです。しかも、とても歌が上手なのです。教会中に響き渡るほどの声量で、情感たっぷりに歌います。今すぐ歌手になれるのではないか、と思うほどでした。

中でも一番よく覚えていたのは、『フランシス』の場合』という曲です。出てくる歌詞、「3月30日の日曜日、パリの朝に燃えた命ひとつ、

フランシーヌ」、ここに出てくる3月30日という日付が、自分の誕生日だったからです。その曲を聴くと、自分がフランシーヌという、洒落た名前のパリジェンヌになったかのような気分になれました。これが、戦争に抗議をして焼身自殺をした女性を悼む歌だ、と知ったのはずっと後年、大人になってからでした。

リクエストをすると、青年は何度でも、『フランシーヌの場合』を歌ってくれました。考えてみれば不思議な光景です。教会の一室で、青年が歌をうたい、小さな子どもがそれに耳を澄ませている。歌っている時、彼は自信に溢れているように見えました。私が拍手をすると、満足そうにお辞儀をしました。2人だけの秘密の音楽会でした。

やがて、青年が姿を見せなくなりました。大人たちははつきり教えてくれませんでした。彼の身に何か決定的なことが起こったのだという雰囲気は伝わってきました。

今でも時折、彼の歌声を思い出します。人生のたったひとときでも、教会のあの狭い和室を自分の居場所だと彼が思ってくれていたなら……。3月30日生まれの子が送る拍手が、ささやかな慰めになってくれていたら……。そう思わずにはいられないのです。

あらゆる人間を平等に見ること。自分の狭い価値観に惑わされ、他者を勝手に切り捨てないこと。人間としての基本的なあり方に、子ども時代、無意識のうちに触れる経験ができたのは、私にとってかけがえのない財産になっていま

す。金光教の教えに接する子ども時代がなければ、小説は書けなかつたかもしれません。

本日は以上です。早いもので、いよいよ次は最終回となります。小説を書くことには、どういう意味があるのか、自分なりに考えてみたいと思っっています。どうぞよろしくお願いいたします。

※お話のなかに『フランシーヌの場合』の歌詞の一部が登場しますが、著作権は郷伍郎氏にあり、作品コードは074-2033-1 (JASRA) になります。



《小川洋子の「私のひきだし」》

「たった一人の誰かのために」

皆様おはようございます。作家の小川洋子<sup>おがわようこ</sup>です。『私のひきだし その4』と題してお送りしてきましたこの放送も、本日が最終回となりました。今日は小説を書くということの意味を改めて考えてみたいと思います。

先日、アニメーションや映画、ドラマの音楽を主に作られている梶浦由記<sup>かじうりゆき</sup>さんと対談する機会がありました。映像を生かすための音楽を作る難しさは独特です。自分の表現したいことを好きに形にすればいいわけではなく、映像を主に役に考えなければいけません。

「つらいよう、苦しいよう、もう辞めたいよ

うの繰り返しです」と仰っていました。

その点は、私も同じです。何作小説を書いても、コツをつかめる、ということがありません。むしろ逆にどんどん難しさが分かり、自分の作品の未熟さに嫌気がさして、ああ、今日もまたあの続きを書かなければならないのか、という憂鬱な気分になります。

ただ音楽家の場合、自分の作品が演奏家や歌手によって、新たな魅力を発するようになりま<sup>す</sup>。コンサートで披露すれば、多くの人たちと感動を共有する喜びが得られます。

「作家はそのような達成感をどうやって得ていらっしゃるのですか」

梶浦さんは少し心配そうに質問されました。

確かに、小説が完成したからと言って、大き

な拍手が沸き上がるわけではありません。編集者と手を取り合い、喜びのダンスに酔いしれることもありません。

けれど、ごく稀に神様はご褒美を下さいます。以前、東京の高校に行き、生徒さん達と私の小説について対話をした時です。1人の女子学生が、『猫を抱いて象と泳ぐ』という本を読んだ感想を語りながら、泣きはじめたのです。感情をあらわにする泣き方ではなく、勝手に涙がこぼれ落ちてくる、という静かな表情でした。

この小説は、チェスの天才的才能を持ちながら、体が大きくなれない運命を背負った青年が、からくり人形の中に隠れ、生涯世間に身をさらすことなく、最強かつ最も美しいチェスを指す、という物語です。ラスト青年は、火事により、

チェス人形とともに焼け死んでしまいます。

「どうして自分が泣いているのか、分かりません」

と、女子学生は言いました。私は涙の理由を尋ねませんでした。人が本当に心を動かされた時、理由の説明など必要ありません。言葉で書かれた小説を読み、言葉の届かない心の奥底にある泉が揺さぶられる。これほど人間にとって豊かな読書体験はないでしょう。しかも、彼女の心の泉を涙に替えたのは、私が書いた小説だったのです。

世界では、戦争や自然災害で苦しむ人々が絶えません。作家の私は、そういう人々に対し、何の手助けもできません。しかし、たとえたった1人であっても、私の小説をなくてはならな

いものと思ってくれる読者がいる。彼女の心に秘められた苦しみに、チェスの青年が寄り添ったからこそ、こぼれた涙だったのだ。

私にとってこの経験は、もったいないほどの感動を与えてくれました。小説を書いてきて良かった、と素直に思えました。

普段、作家は、読者と直接顔を合わせる機会  
は、ほとんどありません。けれどそれでいい  
です。一冊、本になって世に出てしまえば、最  
早、その作品は読者のものになります。一冊の  
本と一人の読者。対一の関係が生まれ、そこ  
に作者が入り込む余地はありません。その対  
一の結びつきが強ければ強いほど、つまり、作  
者が置き去りにされればされるほど、よい小説  
なのだと思います。

川端康成かわばたやすなりは、『文学的自叙伝』の中で次のよ  
うに書いています。

「私が第一行を起すのは、絶体絶命のあきら  
めの果てである。つまり、よいものが書きたい  
との思いを、あきらめ棄ててかかるのである」  
賞賛を求めず、あきらめから出発する。そう  
考えると、小説を書くのは残酷な仕事です。し  
かし、どんなに追い詰められても、絶望はしま  
せん。私には金光教の信心があるからです。

「一生死なない父母に巡り会ったと思って、  
何事でも無理と思わないで天地金乃神にすが  
ればよい」

『金光教教典きやうてん』の中の言葉です。一生すが  
れる神様がいてくださるのですから、安心して、  
ひたすら小説を書くだけです。世界を救うのは、

たった1人を救うことから始まる、と信じて。

『私のひきだし その4』は、ここまでです。

この放送を通じ、皆さまと出会えましたことに、感謝申し上げます。最後までお聴きくださって、

どうもありがとうございました。



《特選アーカイブス》

## 「選んでくれたネクタイ」

岡山県・金光教与井教会 善積晃よしづみあきら

(昭和59年1月18日放送)

もう10年も前のことになりましたが、ある日、子どもらを買いたい物があるというので、家族で福山ふくやまにショッピングに出かけました。デパートに入ると、高校3年の息子が、中学1年の娘に、「ネクタイ売り場はあそこだ」と言って、急ぎ足でそのほうへ行きます。私も2人の後からついて行きますと、子どもらは早速、ネクタイを選びはじめました。子どもが私にネクタイをプレゼントしてくれるなどとは、思いがけないことでしたから、いささか驚きました。

やがて2人は、それぞれ1本のネクタイを手にとり、どちらにしようかと見比べています。私は、「お小遣いもめつたにやらないのに、お年玉でも貯めていたのかなあ。それにしても、うれしいことだ。思いやりのある子を持って、私はなんと幸せ者か」と胸に込み上げてくるものを感じておりました。

「お父ちゃん、これ2本ともよからう」「そうだな。どちらもいい柄だな」「それなら2本にしよう」。2人は割に値段のいいネクタイを2本も私に買ってやるというのです。「そんなに無理しなくてもよいのに」と思っても、言葉が出てきません。ただただうれしくて。

店員さんは、ネクタイを包みかけています。すると子どもらが口を揃えて、「お父ちゃん、

早くお金を出しなさい」。あつと驚く私は、開いた口が塞がらなくて、次の言葉が出ません。

子どもらは、ネクタイを買ってくれたのではなく、選んでくれたのでした。お小遣いの乏しい子どもらにしてみれば、自分たちの買い物をしてくれる親に、せめてネクタイでも選んであげようと、相談していたのでしよう。

時すでに遅く、返品するわけにもいかず、私は財布から千円札を何枚か出して、2本のネクタイの包みを受け取りました。子どもらは、お父さんの気に入った柄を、選んであげてよかったですと思っているのでしよう。呆れている親父の心も知らず、鬼の首でも取ったような顔をして、次の売り場へと行きます。思いがけない子どもらの計画に、私は苦笑いをしながら、2人の後

を追いました。久しぶりにたくさん買い物をした子どもらは、楽しそうに、はずんで帰りました。

それから、私がその2本のネクタイを好んで大事に使用していると、子どもらは、「きまつているよ」とか、「よく似合うよ」とか言つてご機嫌です。私が、「2人が選んでくれたんだからなあ」と、いくらか皮肉まじりの返事をしても、そんなことは問題にしておりません。お父さんがそのネクタイをしてくれたら、それ子どもらは言うことはないのです。

娘が中学3年になった時でしたが、「私が就職したら、もっといいのを買ってあげるからね」と言いました。もう選んであげただけではないと考えたのでしよう。「あてにせずについて

までも待つよ」と言いましたが、私は子どもら  
が、たとえば物など買ってくれなくても、親のこ  
とを思っていてくれることが、何よりのプレゼ  
ントだと思っておりました。

やがて、息子は大学を卒業して就職し、娘は  
高校2年になり、私の誕生日の夕食の時、「こ  
れ、2人で選んだ。お父さんにプレゼント」と  
言って、箱に入ったネクタイを差し出しました。  
私が目を細めてうれしそうな顔をするのを、子  
どもらは満足げに見ていました。2人の子ども  
が選んでくれて以来、私にプレゼントすること  
を思い続けていてくれたのだなあと、しみじみ  
幸せを感じ、ありがたい気分浸ったのでした。  
選んでくれたネクタイも、プレゼントしてく  
れたネクタイも、今では結ぶところが少し擦れ

てきました。随分使わせてもらいました。子ど  
もらの思いがこもっているからか、頑張らな  
くはと、心が勇みました。

私が戦時中、学徒動員で作業に出て、おやつ  
に2個ずつ配られるパンを1個残して、病気で  
寝ている父に持って帰ったことがありました。  
父は、「おいしいパンだな」と、目に涙を浮か  
べて食べた後、「作業でお腹が空くのだから、  
お前が食べればいいのに。わしは寝ているのだ  
から、お腹は空いていないから」と言いました。  
それでも私は、父があんなに喜んでくれるのだ  
からと、何回か持って帰りました。父が亡くな  
った後で聞いたのですが、見舞いに来てくれた  
人たちに、そのパンのことを心から喜んで話し  
ていたそうです。

ネクタイのことも、1個のパンのことも、誠にささやかなことですが、親を思う心は、何

物にも変えられぬ、尊いものだと思います。考えてみると、ネクタイに限らず、子どもなりにいろいろと欲求してくれているようです。そのことを親である私が、もっともっと大きな喜びにしていかなければなりません、気がつかないことが多いなあと反省するばかりです。

私の両親の信心の師匠である佐藤範雄先生が、「親思う心に親は居ますなり守れ我身を親と書いて」という歌を詠んでおられます。

私は、毎日霊前でこの歌を唱えて、いつも親先祖のことを忘れないように、たとえこの世にいない親でも、自分のこの体の中に生きているのだから、日々の生活を大切に、親が安心

してくれるような、良い生き方をしていきたいと願っております。

金光教祖は、「親のことは子が願ひ、子のことは親が願ひ、あいよかけよで頼み合ひいたせ」と論じています。この教えのように、生涯親子が互いに思い合い、願ひ合つていきたいのですが、私自身が、まずよい親にならせてもらわなくてはならないと、心に鞭を打っております。

《こころの散歩道》

「ジタバタするなよ」

2020年、新型コロナウイルス感染症が蔓延し始めました。有名芸能人が亡くなったことをきっかけに、一気にコロナに対する不安が押し寄せて来たことを思い出します。その後、緊急事態宣言が出され、身近な人たちの中にも、コロナウイルスに感染する人が出始め、私の友人も感染してしまいました。熱やのどの痛みもさることながら、「なぜ病気に罹ってしまったのか？ 家族や職場に迷惑を掛けてしまう。私のせいで」と気持ちがマイナス方向へ向き、それに加え、1週間の隔離もあり、孤独の中、さらに気持ちが落ち込んでいくようでした。

友人の様子を知り、「今は、何も考えずに、ゆっくりして。『ジタバタするなよ』」と、昭和生まれの私は、アイドル歌手の歌を文字ってLINE。早速に友人から、「私、シブがき隊になる！」と少し明るく返信がありました。

\*

実は、その1年前のこと。自分なりに、仕事に、家事に、介護に、町内のことまで頑張つてやりきった年の12月。神様に1年のお礼をしよう、金光教の御本部広前に向かったその境内の階段で、足を踏み外し、転んでしまいました。何段か滑り落ち、足をひねってしまった、もしかして骨折してしまったかと思うほどの痛みで起き上がれず、しばらくそこでうずくまってしまいました。通りかかった人が、「大丈夫です

か？」と声を掛けてくれるのですが、私は、痛さと恥ずかしさと情けなさで、顔を上げることができないでいました。

「なぜ？ こんなに頑張ったのに。この年の瀬に、なぜこんな情けないことが起きてくるの？」。私は痛い足をさすりながら、神様に、「なぜ」をぶつけ、自問自答しながらジタバタしていました。「分からない、分からない」。答えの出ない宙ぶらりんの状態にジタバタ、ジタバタ。

\*

ある研究者の、「分からないから研究している。つまり分からないことを楽しんでいる」という言葉に偶然出合いました。「分からないことを楽しむって、宙ぶらりんでいいんだ」と、

そこで気づくことができました。直ぐに答えが欲しくなり、楽になりたくて、原因と結果を結び付けたくなるのは、私の悪い癖。こうと着地点を決めてしまったら、それで終わり。だけど、ずっと、「なぜかなあ」と思いながらも宙ぶらりんでいたら、想像もしなかった着地点に着くかもしれない。ジタバタしなくていいんだと思え、少し気持ちが軽くなるのでした。

\*

そして、今年、金光教の本部の境内で、40歳前後の髪の毛長い女性が、金光教のパンフレットを持って、キョロキョロしているのを見かけました。初めての参拝のようで、私は思わず声を掛けていました。その女性は、御本部広前でお参りした後、「教祖様のお墓はどこなのかな」

と思っているところに、私が声を掛けたようです。「でしたら、ご一緒しましょう」ということで、私は、その女性とともに教祖様のお墓を目指し一緒に歩き始めました。

お墓の前のベンチに二人座り、教祖様に手を合わせました。そして、何もかも受けとめてくださるような、特別な雰囲気を持つ教祖様のお墓の前で、その女性も心を開かれたのか、初対面の私に、なぜ金光教の本部にお参りしたのか、どんな悩みがあるのかを語り出しました。

その女性は、自分の力ではどうにもならない問題を抱え、悔しさ、ジタバタしている心の内をいろいろ聞かせてくれました。ひとしきりお話しした後、私に、「今日ここでお話できてよかった」と涙を拭いながら、その女性は言っ

てくれました。

その女性は、とてもサバサバした行動力のある方で、看護師をされていたそうです。そして今、同じ道を目指している娘さんに、「患者さんに接する時、『面倒みてやりよる』ではいけん」とこれだけは伝えているとのことでした。面倒みてやっているという立ち位置では、信頼関係は作れない。『面倒みてやりよる』という九州の言葉が、グサリと私に刺さりました。

神様はもちろん、いろいろな人たちのお世話になりながら、できてきたこと、乗り越えてきたことを、我が力でやったように勘違いしている自分。正に、『やりよる』私の姿が見えてきたのです。

ジタバタしている彼女の言葉で、ずっと宙ぶ

らりんだった私の心は、思わぬところに着地しました。きっと教祖様が彼女を通して教えてくださったのでしよう。

\*

「風吹かば ふくにまかせつ 雨ふらば ぬれつつ咲ける 藤なみの華」

私の尊敬する大阪の先生のお歌です。宙ぶらりんでいたからこそ思わぬ着地点に着いた私。宙ぶらりんでいる間もジタバタせず、藤の華のように優雅で美しい、そんなふうになれたらなあと思う日々です。



《私の本棚から》

「だれのもんな」

おはようございます。大阪府・金光教金岡教会で奉仕しています岩本威知朗です。金光教に関する書物の中から、後世に残したいお話を紹介する、シリーズ「私の本棚から」。今朝は、昭和57年10月に金光教北九州教務所から発行された冊子、『聲』の中から、『だれのもんな』というタイトルのお話を朗読してみたいと思います。

\*

福岡県の浮羽町で、瓦の製造販売を家業にしていた出利葉氏は、ある大口の売り掛金が回収できず、金光教甘木教会初代教会長の安武松太

郎師に願ひ出た。

師は、出利葉氏から、瓦はどうして造るか、その製造過程を詳しく聞かれた後、やおらゆっくりした口調で、「出利葉さん、そのようにして瓦を作る泥は、だれのもんな」と尋ねられた。出利葉氏はその唐突な質問に、ややあつて、「はい、神様の御物でございます」と答えた。すると師はさらに、「その泥を煉る水は、だれのもんな」と問われた。「神様の御物でございます」と答えると、師はさらに、「それを焼く火は、だれのもんな」と尋ねられる。すかさず、「はい、それも神様の御物でございます」。すると師は、やや改まった口調になり、「出利葉さん、それじゃ出来上った瓦は、だれのもんな」と問われ、出利葉氏は一瞬声をつまらせた。それは、

土や水や火については、素直に神様のものと信じていたが、出来上った瓦は商品であり、わが物と思っていたからである。

そこで師は、次のようなご理解をなされた。

「この道の教祖、生神金光大神様は元々、お百姓の身であらせられ、農業に勤しみ給いつつ、実意をこめて信心を、お進めになり、天地の御恩徳を深くお感じになり、ついには天地の親神様とお出会いなされたのである。特に、お土地の恩、地上の穢きたなきもの一切を黙って受けとめて浄化してくださり、しかもそこから貴たかいものを育くみ、一粒万倍の働きをもって、万物を生かし給う御神徳。生きとし生けるもの皆は、そのお土地より生まれ出で、死してのちはまたお土地にかえるもの。天が父であり、地は母そ

のもの。そのような貴い働きをしてくださる、そのお土地を商いに使わせていただくのである。

その泥を加工するための水や火も、人間がまだ地上に生まれくる以前からあったもので、人間が必要を感じて発明したものでなければ、作り出したものでもない。

この地上に、水、火のどちらが欠けていても、人間はおるか、命という命は一切存在し得ぬ道理であり、その、寒、熱を応用する力も人間だけが授かっているのである。

また一粒の種子を、お土地に蒔かせていただければ、何十倍、何百倍の実りになるごとく、人間の針ほどの働きも棒ほどにしてくださり、お恵みくださるから、生活ができるのである。

しかるに、微力な人間が、僅かばかりの働  
きで生活できるのを、自分の力で生活している  
のであると思い誤っておりはすまいか。

全てのことを自分がするのではない。親神様  
の無限の愛、無限のお力とに育まれて、一日  
一日、あらゆる職業の人間が生活を営ませてい  
ただいていることを自覚し、日夜に、感謝のま  
ごとをあらわし奉るのが、信心生活である」

出利葉氏は、自分の至らなさを思い改まり、  
先方の立ち行きを願う心になり、先方から売り  
掛け金を持つてくるおかげを頂かれた。

※ラジオ放送用に変更を加えている箇所があります。

表記は原典に基づいています。

\*

いかがでしたか。このお話に登場する安武松

太郎師は、「親神様のご慈悲<sup>じひ</sup>」として、次のよ  
うにも教えられています。

「一粒の種子を、これは何々の種子と聞いて  
買うが、果たしてこの種子が花になるだろうか  
と疑う人はなく、また、その通り花が咲くので  
あります。その元は泥と水であります。花の色  
はいろいろであり、泥と水からできたから土臭  
かったり、水臭かったりするかというと、さに  
あらず、実に気持ちの良い香りを放ち、人を喜  
ばせ楽しませるのは親神様のご慈悲でありま  
す」

また、この冊子の後書きには、次のようなこ  
とが書かれていました。

「生きるために、私たちは様々な自然の恵み  
を享受している。天地の親神様は私たちを生か

すために、一切を自然の営みとして与えてくださり、私たちは生かされて生きている。

科学文明の発達にも関わらず、私たちの難儀は増し、天地自然に対しても、土足で踏み込み、自然界の調和を乱して、自らも苦境にあえぐ状態になっている。

天地の物を自分の物と錯覚するところから、人間と天地自然の關係に歪みが生じているのではないか。

一粒のお米の中にこもる、限りない天地の親神様の祈りを知る時、万物を生かそうとする働きは無限に發揮される」

そんなふうに書かれていました。

現在、私たちの生活は便利になっていく一方で、全て自分たちの力で生み出しているかのよ

うに勘違いし、難儀なことが増しているように感じます。改めて私たちは、この世の物、全てが、「天地の物」との道理を知り、常に、「だれのものな」と問い掛け、確認し、身の回りの物、全て、「神様の恵み」として受け取らせていただく心が大切なのだと痛感します。

《信心ライブ》

「みんなで見よう『安心メモ』」

(ナレ) おはようございます。今日は、金光教本部にお勤めの金光清治こんこうきよじさんが、令和5年1月10日、金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

ご家族が相次いで、新型コロナウイルスに感染された時のお話です。当時、金光さんのお宅では、ご夫妻と高校生の息子さんが2人、そして、小学5年生だった娘さんとが、一緒に暮らしていました。

(金光) 昨年の夏、新型コロナウイルスの第7波のピークの中、同居家族の5人全員が、コロナに罹る

ということがありました。

症状としては、息子たちは、一時40℃ほど熱が出ましたが、私を含む他の家族は、解熱剤を飲むほどの熱も出ず、軽く済ませていただきました。

まず、小学5年生の次女についてですが、最初にお兄ちゃんがコロナになった時に、とても心配してですね、不安な気持ちを妻に話していました。その時に妻は、「熱が出るのは、体がウイルスと戦ってくれている証拠だから、ありがたいんですよ。病気は、怖いだけじゃなくて、ありがたい面もある。おかげの中の事なんだよ」と、伝えていたようでした。

その日に次女が、A4の裏紙に鉛筆で、『みんなで見よう安心メモ』というタイトルのもの

を書いて、壁に貼りました。タイトルの右には、

「金光様、金光様」と書いてあります。続いて

次のように書かれています。「すべておかげの

中のこと」。「おかげ」という文字だけ、何倍

も大きな字で書かれていますね。「すべて、

お・か・げの中のこと。熱が出ても、治してく

ださっている最中♡。コロナになっても、願

いしたら大丈夫」。腕を曲げて、こぶしのつい

たマークが描かれています。そして一番大きい

字で、「すべてお願いし、神様にお任せしよう。

☆印が2つ」。そして書いた日付が、「202

2・8・6（コロナ）」と書かれています。そ

れで左下のところには、小さい字で、「お母さ

んがいるから安心できるよ。ありがとう。ここ

にこマーク。大好き♡」。やっぱりお母さんな

んですね。お父さんじゃないんですね。ここも  
ポイントですね（笑）。

プリントの一番下の余白のところには、小さ  
い字で、全てひらがなですね、「しんぼうし  
ておかげをいただく」。矢印をして、「金光の  
おばあちゃんが電話で言ってくれた。少し元氣  
が出た。頑張って乗り越えよう😊」。そして最  
後に♡マーク。

高校生のお兄ちゃんが1人罹った時点で、心  
配した10歳の次女が、このようなものを書いて  
くれたんですが、その翌日、次女も熱が出て、  
喘息持ちのために、息が少し苦しくなったりし  
ました。それで、またまた不安が膨らんで、心  
も体も苦しい状態になってしまいました。我が  
家では、子どもたちに読ませたい教会報や新聞

記事などを、妻が目につきやすいところに置いてくれているんですけれども、そんな状態の次女が、「これを読んだら息が楽になった」と言うんですね。そのお話の一部を読ませていただきます。

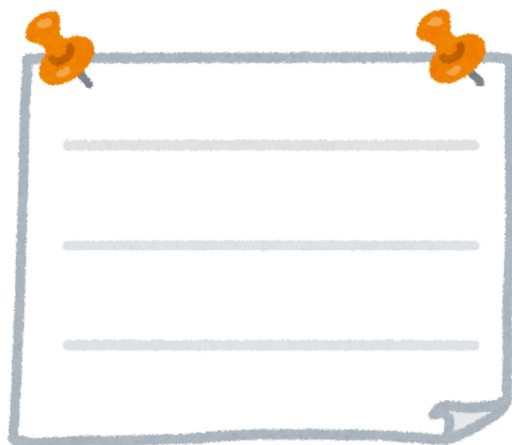
「生きている以上、必ず何らかの問題に直面します。その問題にどう向かうかということが重要なのです。教祖様は、『人間であるから、生きている間は先々のことを考えもしようし、心配の尽きる時はあるまいが、それがみなおかげになれば、心配はあるまい。心配は、信心すればみなおかげになる。心配は体に毒、神に無礼である。心配する心を神に預けて、信心する心になればよ。おかげになる』」

お兄ちゃんに続いて、自分も「コロナになって、

喘息もあって、息が少し苦しくなって、「ひどくなったらどうしよう」「家族に移したらどうしよう」と、不安で押しつぶされそうになった時に、「心配は体に毒、神に無礼である」というみ教えが、特に響いたようです。「心配する心を神に預けて、信心する心になればよ。おかげになる」というみ教えに触れて、「ああそうか。心配は、神様に預けたらおかげになるんだと、ほっとしたら、息が楽になった」と言うんですね。やはり、おかげを頂く一番の近道は、素直ということだなあと、娘を見ていて、私も字ばせていただいたわけですが、娘は、コロナを通して神様のありがたさを、理屈ではなく、体で実感するというおかげを頂きました。

(ナレ) 新型コロナウイルスが、爆発的に感染者を増やしていた頃。金光さん一家のように、自宅で療養された方も少なくなかったでしょう。子どもさんにとつて、迫り来るコロナの感染は、どんなに怖かっただろうと、今さらながら胸が痛みます。

その怖さや心配を、神様に預けて楽になったというお話。神様への祈りに満ちた、穏やかで温かなご家族の様子が、目に浮かびました。人生の重たいものは神様に預けて、軽やかに、ありがたく生きていきましょう。



《特選アーカイブス》

「人を祈れる私に」

京都府・金光教田中教会たなか 谷上正三たにがみしょうぞう

(昭和61年1月29日放送)

ある日の夕暮れ、救急車のサイレンがすぐ近くで鳴り止み、一時をおいて、再び救急車は遠ざかってゆきました。近くに消防署がありますので、いつものこととそれほど気にも留めていませんでしたが、ほどなく、「先生、お宅の奥さんが今、救急車に乗って行かれましたけど…」と、隣の奥さんのかん高い声が飛び込んできたのです。その瞬間、私は頭の中から一度に血の気が引くのを覚えながら、足は一目散に表へ向かって走っていました。「何事が起きたの

だろう。先ほどまで落葉を焚いていたのに、これは大変なことになった」。動悸が激しく打つのを抑えながら、言葉もしどろもどろに、その奥さんに事情を聞きました。「先生、そう慌てんとおきやす。お宅の奥さんがどうこうならはったんと違うて、その青山さんの淳子ちゃん、急に気分が悪うなつて、倒れられはりましたんや。お母さんが留守やさかいに、代わりに行ったげはただけです」。私はそれを聞いて、一遍に動悸の高まりが治まり、ああ良かった、やれやれと、胸をなでおろしたのでした。「それにしても、初めにそうと言ってもらえれば、何でもなかったのに」。内心そうつぶやきながら、夕飯の準備が途中で置いてある台所に立って、その続きを始めました。その時、私はふと

8年前の次男の交通事故を思い出したのです。

それはまだ、うすら寒い3月の初め、この時と同じく真近くで救急車が止まり、近所の人が、「お宅の子たちがえらいことどっせ」と言っていて知らせてくださったのでした。慌てて表へ出てみると、当時小学校2年生の次男が倒れているのを、救急隊員の人が担架に乗せようとしておられるところでした。そして、家内が一緒について病院へ運ばれて行った後、大勢の人だからの中、警察官より事情を聞かれているそのそばで、「ああ、うちの孫と違くてよかったわ」と言う声が耳に入りました。私は、その時の冷ややかな寂しい、何とも言えない気持ち、今でも忘れられません。

あの時と状況が全く逆である今、その時、老

婦人に少なからぬ憎悪を覚えた自分が、まるつきり同じことを思っているのです。私は、淳子ちゃんにすまないことをしたなあと、心中で詫び、神様に改めて、どうぞ一時も早く回復するようお願いし、また、8年前の老婦人に対しても、よろしからぬ念を抱いたことを神様にお許しを願ったのでした。

お互いに、家族や身内のことを思わぬ人はありませんが、だからといって、他の人に思いを掛けずに平気であるというのはどうでしょうか。私はこの2つの事柄に出くわしてみて、「自分分は得手勝手なところが潜んでいるのだなあ」と思うのです。そして改めて、金光教祖のみ数えをわが心に照らしてみます。「天地の間に住む人間は皆神の氏子、天が下に他人とい

ことはなきものぞ」という教えがあります。神様からご覧になれば、人は皆かわいいわが子であります。私が、救急車に乗って行った家内は人様のお世話のためで、その身の上に何事もなかつたことが、後で分かつてやれやれ安心と思つたり、次男の交通事故で、どこかの人が自分の孫でなくて良かったと思う時も、神様は全てわが子としてお心を痛めておられるのです。

たとえ人間として、人情で瞬間にやれやれと思ふことを許されたとしても、そこから神様のお心を受けて、苦しみや悩みのある人に、愛を持って自分にできることはさせてもらい、手の届かぬところはそこから、その人の安心と立ち行くことを神様にお願ひしてゆくことが、人としての姿勢でありましょう。このことは、今さ

ら申すまでもない至極当然のことでもあります。が、私は、自分が一つのことにと当たって、改めてその意味の大切さ、深さを痛感させられました。

そしてその日、2時間ほどして、家内が病院から帰ってきました。淳子ちゃんの状態も大したことなく、一晩の入院ですむということで、私どももほっとしました。家内も、やはり8年前の次男の事が思い出され、淳子ちゃんとうわが子と二重写しになり、神様に一生懸命お願いし続けたと言います。

明くる日、「おばちゃん、昨日ありがとう」とお礼に来た淳子ちゃんは、いかにもうれしうで、喜びに満ちた笑顔でした。私たちはその姿に触れたとき、その子の喜びが心の中までし

みとおり、すがすがしい気持ちにならされたの  
でした。私の心の中は、まさしく、淳子ちゃん  
は他人ではなくなっています。そしてこれから  
もずっとそうであると思います。私と家内も俗  
に、「夫婦は他人」というとおり、元々は全く  
見ず知らずの他人にほかなりません。それが20  
年間一緒に生活をしている中で、様々な思いが  
なされて、互いに他人でないものが生まれてき  
たのであります。

かつて、ある重度身体障害者の方の施設を慰  
問したことがあります。その中で、体の不自由  
な方々のお世話をされている、若い女性の人た  
ちが、職業病といわれる腰痛にもめげず、一生  
懸命励んでおられます。そのお一人おひとりが、  
「障害に悩まされている子どもたちから一時も

離れられない。朝になると、一刻も早く行って  
あげたい気持ちになられます」と話されまし  
た。私たちが神様の子でありますことは、すな  
わち、その愛を常に受け、また、その愛を人に  
も与えたり受けたりできる心を持っているので  
す。

金光教祖は、かつてお参りの人に、「人には  
できるだけのことをしてあげ、人に物をやりた  
くてしかたがないという心を持ち、自分だけよ  
いことをしたいというような心を持つな」とか、  
「たとえ人にたたかれても、けっして人をたた  
くのではないぞ。人に難儀をさすな。よい心に  
ならせてもらえば、ありがたいと思ひ、すれ違  
った人でも拜んでやれ。できれば人を助けられ  
よい」と教えています。

今月今日、私は、自分と人々が共に助かり、  
よい心になれるよう、実際の生活の中での応用  
問題を間違わぬようにしていきたいと、神様に  
お願いをしている日々であります。



《こころの散歩道》

「あなたを信頼しています」

私の娘は、大手スーパーの野菜・果物売場で働く6年目の社員です。

ある日の夕方、お店の電話が鳴りました。取引先や本部で何かあったか、はたまたクレームか。良くないことが脳裏をよぎったと言います。予想は的中しました。

「おたくで買ったメロン、柔らかすぎて食べられへんわ」

電話口の声は、お店によく来られており、たまにお話をするお客様でした。商品不良のクレームは、お詫びの上で自宅まで伺うのが一般的です。娘は謝罪する傍ら、仕事後の予定を思い

ました。その日は早く帰りたいだったので。常連さんであることに甘え、「ご自宅に伺います」と言えずにいました。話の中でお客様が、「次お店に行った時に持って行く」と言ったため、娘は内心ホッとしましたと言います。

10分後、また電話が鳴りました。上司が電話を取り、何やら神妙な面持ちです。

電話後の上司から聞いた内容は、シヨッキングなものでした。先程のお客様が、娘の対応に怒り、別の者に家まで、替わりの品物を持ってきてほしいとのことでした。

娘は、普段、自分の接客には自信を持っていましたが、甘えてしまったことへの後悔や驕りおごり、申し訳なさが渦巻きます。

しかし、ほどなくして、お客様の自宅から戻

った上司の第一声は、信じられないものでした。

「お客様が、褒めてたよ」

娘が首をひねると、上司は言いました。

「お客様がこう言ってたよ。いつも対応してくれる人がすごく良い人やのに、電話口の人は……と怒ってた。でもそれは両方、君の話で、それをお客様に伝えたら驚いてたよ。怒らないであげてくださいって言ってた。自分が今悪く言ったことを、君には言わないでほしいって！」

お客様からの信頼を裏切ってしまったこと。

その信頼は、日頃の接客の積み重ねであったこと。この日の一件は、戒めとして今も思い出すと書いています。

\*

私の両親は仲の良い夫婦でした。お互いの

ことを信頼していました。父は大正生まれでしたが、ママに動く人で、率先してゴミ出し等もしていました。母は父のことを頼りにしながらも、陰では父のことをしっかりサポートしていました。お互いに相手に対して、あれをしてほしい、これをしてほしいと望むのではなく、相手のために何をしてあげようかと思いつきながら、生かしているようでした。相手に求めてばかりいると、思いどおりにならない時、腹が立ってしまふからだと言っていました。2人は喧嘩をしたことがありません。

父は、私のことも愛してくれていましたが、私が昔、母のことで腹が立ち、父に分かってもらおうとしたことがありました。しかし、父はどんな時でも穏やかに、「お母さんはそれだけ、

あなたのこと思っていると「ことや」と言っていました。私とすれば、ただ共感してほしかったんですが、父は母を悪く言うことがありませんでした。母のことを大事にしていたからだと思います。：あの時若かった私も、今では子どもを持つ親になり、そうなって初めて、その時の母の気持ちが、痛いほど分かるようになりました。「やっぱりお父さんの言っていたとおりで、お母さんは私のことを思ってくれていたんだ」と。今ではとても懐かしいです。

そんな両親は5年前に亡くなりました。父は10月、母は翌11月でした。なんと母の命日は、2人の結婚記念日でした。偶然にも、その日に他界した母です。長い時を重ねて、信頼で結ばれていた父と母でした。

\*

私には、悩みをストレートに打ち明けられる人がいます。とにかくよく聴いていただき、しっかりと受け止めてくださいます。何より、私のために一生懸命向き合ってくださいるのが、しみじみと伝わってきて、それだけでも気持ちが救われます。信頼できる人だから話せますし、それによって、心がだんだんと軽くなっていくのです。

そして、それとは反対のことですが、私は金光教師として、人の悩みを聴く立場にあります。聴かせていただいた後、「どうぞこの方の問題が良い方向にいきますように」とお祈りしています。すぐに結果が出ないことでも、信じるようにしています。初めは元気のなかったそ

の人が、明るい表情に変わるとうれしくなるのです。まず、心を許して打ち明けてくださることがありがたいです。

\*

信頼：。よく耳にも口にもする言葉ですが、信頼とはいったい何なのでしょう。

揺るぎないような、脆いような、目には見えないもの。

人と人をつなぐ大切なもの。

でも、信頼関係は簡単に築けるものでもないですよね。きっと、人を大切にする日々の積み重ねの中に、気がつけば生まれてくるものなのかもしれません。

どうか、今日という一日が、信頼に繋がる生き方になりますように…。



《私の本棚から》

「愛はふたたび」

おはようございます。兵庫県にあります、金光教いんげうしゅう出石教会いしずしの大林誠おおはらまことです。

シリーズ「私の本棚から」。今朝は、昭和56年に刊行された、『愛はふたたび』という本をご紹介します。

著者の平本行雄ひらもとゆきおさんは、5歳の時に戦災孤児になり、以来、逆境が続いて、すさんだ生活に陥っていきました。しかし中学3年生の時、そんな平本さんを、ある金光教の教会が家族のように温かく迎え入れ、高校にも通わせてくれたのです。この本は、その実体験を小説風に書いたもの。一部を抜粋して読ませていただきます。

\*

行雄は、最初は教会を裕福と思ったが、それは、これまで育った家に比べてのことであって、贅沢な暮らしではなかった。

他の人には、庠いところに手が届くようにお世話をされるのだが、ご家族の生活は実に質素なものであった。自分たちの楽しみというものがなく、旅行や観劇に行かれることもなかった。

「美味しいものを頂いたり、いい着物を着たり、温泉などに行くよりも、人様が喜んでくださることが、一番にうれしいことです」ということであつたから、そういうことには見向きもなさらないのである。人間として、一般的な楽しみを捨ててまで人に尽くすことが、それほど大切なことなのだろうか。行雄は自分が世話

になっっていることも忘れて、疑問に思うことばかりであった。

だが、そういうご家族の深い愛情も、行雄の心の硬い氷を溶かすには、一朝一夕にはいかなかったのである。

そうしたある日、行雄の心を大きく揺るがす出来事が起きた。いつものように遅い起床で2階から降りていくと、この日に限って妙な雰囲気である。

「何かあったのですか？」

「うん、お母さんの手文庫が見当たらんらしいで……」

行雄はドキッとした。続いて嫌な予感が頭を走った。これまでも、こういうケースはしばしば経験している。何か物が無くなったりすると、

次に起こることは疑われることである。

「もし疑われたり、尋ねられたりしたら、教会を出て行こう」

行雄は心の中で決心を固め、教会の人たちの動向を見守った。

手文庫はついに見つからずに、盗られたという結論になった。金額はどうでもいいが、大切な書類なども入っているから、一応、警察に届けようということになった。

幸い信者さんの中に警察官の人がおられたので、奥様が電話で頼もうということになった。

警察という言葉が嫌な思い出とともに、行雄に過去を蘇らせた。

「やっぱり俺は疑われてるんや。自分たちで聞くのが辛いんで警察に頼むんやな」

行雄は、やっぱり大人はいざとなると汚いと思っ  
った。

「疑うんなら疑え、後で犯人が分かって謝っ  
ても遅いで。こんな人間でも五分の魂は持つて  
るんや。金光教は邪教やと世間に出て宣伝した  
るわ」

自分が疑われていることを予測して、行雄は  
警官からの尋問があることを覚悟した。

「もしもし、あっ、Kさん、ちょっと調べて  
もらいたいことがあるんですけど……」

奥様の電話の音が、障子を通して聞こえてき  
た。行雄は、どういう会話になるか全神経を集  
中した。障子を隔ててはいたが、相手の声も微  
かに聞きとることができた。

「ああ奥さん、何か変わったことでもありま

したか？」

「ええ、ちょっと手文庫が見当たらなくなっ  
て……」

紛失した時の情況説明や、何が入っていたか  
というようなことが縷々続いたが、説明を聞い  
たKさんは、次のように言った。

「よく分かりました。早速に行って調べてみ  
ますが、内部の事情に詳しい者の犯行ですなあ」

「というと？」

「いや奥さん、教会には、ほかの子どもさん  
も居られますねえ？」

「ええ、あんたも知ってはるとおり、ほかの  
子いうたら行雄さんのことになりませうかねえ」

「あの子の過去のことは、もちろんご承知で  
しょうねえ」

「そら知ってますがな、それで？」

「いや詳しく調べてみないと分かりませんが  
内部の人間がしたかも知れません」

「あんだ、ようもそんなこと言いなさるな。

そら以前のごとは、わても少しは知ってますせ。  
けど、いつまでもそんなこと思うてはったら困  
りますなあ。あの行雄さんを疑うてはるんでき  
か？」

「いえ、別に疑う訳ではおまへんが……」

「そういうふうに聞こえますがな。あんだも  
何年信心してはるの。私らがどう思うて、  
あの子を育てているか分かってはりますか？  
あの子が怪しいやなんて、ようそんなことを…

…あの子はそんな子と違います」

「分かりました。そんならすぐ調べます」

電話は切れたが、行雄はそのまま動くことが  
できなかつた。

涙が目に滲しみんできて、前が見えなくなってい  
つた。

「もう俺は、この先生や奥様についていこう。  
この金光教を信じていこう。世界中の人が、『金  
光教は邪教だ。信じるな』と反対しても、教会  
の家族の人たちが信じておられる限り、この道  
についていこう。それに、どうすれば親先生や  
親奥様のようになれるのか、どうすれば、見も  
知らぬ人にでも深い愛を示していけるのか、そ  
れをじっくりと見届けよう」

行雄は、そう決心した。

※ラジオ放送用に変更を加えている箇所があります。

表記は原典に基づいています。

\*

いかがでしたか。平本さんは、後に金光教教師となって、人助けに一生を捧げられました。自分は愛されているという実感が、いかに力強く人生を支えるか、また、生き方を変える力にもなるかということ、この本は教えてくれます。そして私も、教会を預かる一人の人間として、この教会の奥様のあり方に、襟を正される思いがするのです。



《特選アーカイブス》

「イライラ母さんからの手紙」

宮崎県・金光教西郷教会 さいじょう 塚本ひろ志 つかもと

(平成元年3月29日放送)

前略。お元気ですか。わが家はみんな元気です。いや、ちよっぴり元気じゃないかな、私の心。このイライラ母さんぶりは、とても健康的とは言えませんがね。このことは後で聞いていただくとして、いつの間にか二人の子どもの母となった私が、最近思うことを少し聞いてくださいね。

ついこの間のことですが、子どもを連れて買い物に出ました。駅の階段を1歳半になる下の子は、私に手を引かれて一段一段上って行きま

す。3歳3カ月の上の子は、一人さっさと上ってしまいました。その姿を見ながら、上の子がやっとハイハイをして階段を上がるようになった頃、「足だけでひよいひよいと上がるようになるのは、いつなんだろう。どんなふうにして、そんなことができるようになるのかな」などと思ったことを思い出しました。その時は、人の手にも自分の手にも頼らず、自分の二本の足でバランスよく階段が上れるということが、不思議でならなかったのです。ところが、いつの間にかこうして、一人でどんどん上れるようになっていくのです。

こんなことっていくつもありますよね。靴を脱ぐこと、履くこと、おしっこやうんち。どう教えたらいいんだろう、いつになったら自分で

できるようになるのかしらと、あなたも思ったことがあるでしょう。

「どんなことも神様にお願ひし続けなくっちゃ」という友人の言葉に、そうだそうだと神様に手を合わせてきましたが、いつの間にか、靴を履くこと、脱ぐことに手がかからなくなり、いつの間にか、いえ、確かにオムツがとれるまでは長い日々でしたが、上の子はとうとう、「おっしこー」と言つてはバタバタとトイレに駆け込むようになり、「うんちー、お母ちゃん行こう」と言つては、私の手を引っ張つてトイレに行つて、できるようになりました。

また、道を歩いていて、人とすれ違う時、ちよこんと頭を下げて、「こんちわー」「おはようごないます」と舌の回らぬ口であいさつをす

る。おもちゃのブロックで、私なんかの考えもつかないようなものを作りあげる。ハイハイ真つ盛りの弟が玄関先に来ると、「あぶない。お母ちゃん、あきおくんが落ちるー」と、半泣きで私を呼ぶ。「夕焼けがきれいだねー」と、さらりと言う。

ちよつと親バカと言われるかもしれませんが、誰もができていくことでも、そんな場面場面に合うたび、ああ、こんなことができるようになった、こんな心が育つていたと、一人胸を熱くしています。

自分が子どものことで願うその時、その時期の願ひを含めて、またそれをずっと超え、もっと大きく包み込むようにして、私なんか思いも及ばない働きを、子どもの成長の中で見せて

もらっている思いです。

ところが、私がそんな感動を覚えていたある日、もう一つのこと気づかされました。金光教の教主様から、こんなお話を聞かせていただいていたのです。

「子どもは、あなたが分からずにきたこと、知らなかったことを教えてくれている。そう思いながらお礼申しつつ、お世話させてもらいましよう。おしめを換える時も、『ありがとうございませう』と言うてな。うんちが出たら、『ありがとうございませう』、子どもが泣いたら、『ありがとうございませう』と言うてな」

つまり、わが子の成長を見るということは、そのまま私自身が受け、頂いてきた働き、成長を見ているということ。子どもがこんなことが

できた、こんな心が育っていたというありがたさは、そのまま私自身がそういうものを頂いてきたということ。もちろん、私自身は分からずに知らずにきたことだけれど、それをこうして子どもが教えてくれているのでしよう。また、「子を持つて知る親の恩」と言われますが、親にお世話になってきたということも、教えてくれます。だから、子どもの世話をする中で、どんな時もお礼を申しながらさせていたかどうか、教えてくださったように思うのです。

下の子どもの成長の中で、今度は、「いつかはできるようになる」と、まだできなくても、またそれができるようになっても、当たり前のように思ってしまうがちな私の心ですが、願うことはもちろん、こうした日々の成長にお礼の

心を忘れずにと、改めて言い聞かされています。

でも、そうは言っても日ごろの私ときたら、自分であきれるほど気短かで、ヒステリックで、お礼の心を持つ余裕もなくプンプン怒っている、イライラ母さんをやっていることのほうが多いのです。子どもがお茶をこぼせば、「もう！」と言い、子どもの寝起きが悪いと、「どうして泣くの！もつと寝てなさい」などと言ってしまう。

そんな私の毎日を知ってか知らずか、つい最近、実家の母が、こんな話を私に聞かせてくれたのです。「あなたたち四人の子どもを育てながら、いつも言う前に祈らせてくださいと神様に祈っていたねえ」と。私たち四人の兄弟姉妹を育てるのは、私が今、二人の子どもを育てて

いる以上に大変だったと思います。言いたくもないのに、言わずにおれず口にしてしまう。分かっていても、つまらない言葉や態度で、子どもの心を傷つけてしまう。だけど、ちょっと間を置き、心を静めて言えば、出てくる言葉は子どもの力となり、親も子どもも、全く違う生き方ができるのです。だから、言う前に祈りたい。ところが、それもなかなか出来ない自分。だからこそ、言う前に祈れるような自分にならせてくださいと願う。母の言葉に、こんなことを感じて私は、何だか力づけられるようでした。

イライラ、プンプンしてしまう自分だからこそ、今も私は祈っています。

「言う前に祈らせてください」と。  
久しぶりにあなたへの近況報告でした。今度

あなたに会う時、ちよっぴりいい母さんになっ  
ていられたらいいのになあ。ではまた。



《特選アーカイブス》

「お空気様」

佐賀県・金光教浜崎教会 はまさき 寺井祥二 てらいしやうじ

(昭和61年12月17日放送)

ある2月の寒い夜のことでした。私は一日の仕事を終えて、妻や娘の待っている部屋のドアを開きました。「お父さん、お仕事はすんだの？ 私たちと一緒に遊んでくれるの」と、娘が声を弾ませて尋ねました。私は忙しきにかまけて、しばらく娘の相手をしてやれなかったことに気がついて、「よーし、お前たちが寝るまで、一緒にいてあげよう」と言うと、「ワイー」と言っ  
て、私の腰にまとわりついてきました。横で、妻が繕いものをしながら笑っていました。久し

ぶりの家族団らんに、一時の幸せを味わっていました。部屋の片隅で、石油ストーブが赤々と燃えていました。

しばらくして、頭痛やのどの痛み、体のだるさを覚え、部屋の空気が濁っていることに気がついた私は、慌てて窓を開けました。暗やみの中から、冷たい空気がサーッと部屋に流れこみ、私の頬を差しました。狭い部屋のことですから、3分もすると、すっかり新鮮な空気と入れ替わって、「やれやれ、もう少しでみんな中毒になるところだった」と言っ  
て、娘たちに、時々、部屋の空気を入れ替えなければならぬことを話しました。

その時、私の心に新たな感動が湧きあがるのを覚えました。それは、新鮮な空気  
の存在です。

わずか3分の短い時間、窓を開けっ放しにして  
いるだけで、部屋の空気が入れ替わり、体の調  
子を回復させてくれる。それほどの力が、空気  
にはあるのだということ、その時改めて感じ  
たのです。しかも、私だけではなく、妻や娘も  
同様に、この見えない空気のお世話になってい  
る。もし、誰かがこれほどの働きを私たち家族  
にしてくれたとしたら、私は、どれほどその人  
に感謝をし、お礼を言わなければならぬのだろ  
う。物言わぬ空気なれば、どれほど世話になっ  
ても、何も言わなくてもよいのだろうか。いや、  
お礼を言うどころではない。「今夜は冷えるな  
あ。毎日よくもまあこんなに寒さが続くなあ」  
と不足ばかり言ってきた私です。たとえ寒か  
ろうと暑かろうと、この空気の世話になって、

私は生きてまいりました。この世に生を受けて  
42年間、母の乳房にすがりついていた時も、幼  
稚園のお遊戯会で口をパクパクさせながら出演  
した時も、小学校に通じる桜並木を歩いて登校  
した時も、新緑燃ゆる初夏の山道を息を弾ませ  
ながら歩いた遠足の時も、秋晴れの中、息絶え  
絶えに最後まで走り抜いたマラソン大会の時  
も、かじかんだ手に白い息を吹きかけて、暖め  
ながら頑張った入試の時も、就職し、営業マン  
として銀座ぎんざの街を駆け巡った時も、神様を求め  
て修行の真似事をしていた時も、思い返せばい  
つも新しい空気が私と共にありました。私の人  
生を人生たらしめてくれた大きな土台が、この  
空気だったのです。さらに、これからもお世話  
にならなければ生きることのできないこの空気

を、私は、「お空気様」と拝まらずにはいられますんでした。

「お空気様」。それは、何千年、何万年もの昔から、一日の休みなく、私どもに働き続け、あらゆるものに命を与えるもとの働きをなしくだされてきました。天地と共にあつて、人類を、この地球上のあらゆる物を、包み込み、育み続けてこられました。それは、ちっぽけな私には、想像もつかないほどの大きな愛のように思えます。

ところが、今日まで私は、これほどお世話になり通しのお空気様に、ただの一度もお礼を言ったことがあるだろうか。何の断りもなく、何も感じることなく、当たり前のように吸ってまいました。そして、自分の都合で、感情のま

まに不平不足を言いながら、生活を営んできた私であります。

言い換えれば、親の世話になりながら成長したにも関わらず、自分一人で大きくなったように錯覚し、自由奔放な生き方をしている、思いつ上がった私の姿のように思えてきました。「亡くなつて知る親の恩」とか言いますが、たとえ空気は無くなるということはないにしても、自分に吸う力がなくなつてから、いくら感謝しようとしても、それはできないことです。一呼吸、一呼吸、お空気様の偉大なる働きに、お礼を申して吸わせていただくような気持ちにならされました。

また、この空気の世話になる全ての動植物の中で、お礼が言えるのも人間だけであることを

思えば、一呼吸の中にお礼が言える心が、また  
ありがたいと感じるのです。

金光教の教主は、

「世話になるすべてに礼をいふ心教へたまへ  
り有り難きかな」

と歌っておられます。

寒い冬の夜に、わずか3分の短い時間、開い  
た窓から流れ込む新鮮な空気の働きに、私は人  
を生かしてやまぬ、天地の親神様の働きを感じ  
るのです。ところが、ひとたび目を社会に向け  
ると様々な公害によって、大気汚染は、時々刻  
々と広がっている現実があります。まるで、人  
間が人間の首をしめているかのようにありま  
す。今こそ私たちは、物言わぬ天地自然の恩恵  
に目を向け、感謝する心を大切にしなければな

らない時ではないでしょうか。広大な天地の働  
きの中で、とりわけこの、「お空気様」こそ、  
天地の親神様をご用意くださった、限りないプ  
レゼントだと、日夜お礼を申さずにはおれない  
気持ちであります。

**金光教本部 ラジオ放送係**

**住所** 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

**電話** 0865-42-6453

**FAX** 0865-42-2114

**メール** w-master@konkokyo.or.jp

# KONKOKYO

**朝日放送** 木曜日 あさ4時35分

放送センターHP  
「こころで聴く  
おはなし」



「こころで  
聴くおはなし  
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。